

教育と文化

みんなで
考えよう
人権・同和問題
No. 235

周りに流されない勇気を

このコーナーは、隔月のシリーズで掲載しています。これを手がかりに、家庭で人権・同和問題について話し合ってみましょう。

「直進するのかな」と思っていると、右折する寸前にウインカーが点滅して対向車が走り去っていきます。方向指示の合図が遅く、戸惑うことがあります。何のために、誰のために合図をするのでしょうか。

信号が黄色から赤に変わっても、減速もしないで無理に交差点に入る車も目にします。交通ルールを守ることの大切さは、誰でも分かっているはず。

『赤信号 みんなで渡れば怖くない』という流行語がありました。周りに配慮を忘れた行為の背景には、周りに同調し流されてしまいがちな心の動きがあるのかもしれない。

例えば、人権問題に関する市民意識調査（平成28年3月）のなかで、同和地区出身者の結婚について、7.5割の人が『自分がかまわないが、

世間体があるから、できれば結婚させたくない』という選択肢を選んでいきます。

そこには、子ども本人の幸せよりも、周囲を気にして世間に振り回されている実態があります。

日常生活のなかでも、大や友引などの六曜を気にする風習や、血液型と性格を結び付け偏見の目で他人を判断してしまうことがあります。

『世間体』は、和を重んじる日本人特有の人間関係において、潤滑油としての働きもあるのですが、その反面、偏見や差別の温床にもなりがちです。

「みんながしているから」、「誰もが言っているから」という周りの圧力から抜け出し、いま一度自分自身の価値基準で行動を見つめ直し、心の中での偏見や差別に向き合う姿勢が求められているのではないのでしょうか。

郷土の文化財

伊万里湾の歴史シリーズ⑫

● 問合先 生涯学習課文化財係 ☎ 3186

カプトガニ

カプトガニは2億年前から姿を変えることなく、生き続けていることから、『生きていく化石』と言われています。なぜカプトガニは進化をしなかったのでしょうか。

さまざまな説がありますが、自然環境による変化に強かったため、進化をする必要がなかったことがその要因の一つと考えられています。

しかし、近年では港湾の開発など、短期間で環境が大きく変化しました。この変化に対応できず、絶滅危惧種に指定されるほど生息数は減少し、生息地も縮小しています。人間のための行為は、人間よりも前から存在する生き物の命を奪ってしまっているのです。

この危機を脱するべく、

日本各地のカプトガニの生息地では保護活動が行われており、多くの人々の手で、カプトガニの命が守られています。

伊万里湾周辺では、いづろからカプトガニが生息しているのはまだはつきりしていませんが、悠久の昔から、伊万里湾の歴史を静かに見守ってきたのかも知れません。



↑産卵中のカプトガニ（砂に入っている方がメス）